

日比野十朗 ひびの 小説家。明治二十六年四月、二十九日東京生れ、昭和五十年九月十日歿（一九三二七五）。第八高等學校中退。兵庫の餅村のり代用教員を経て、昭和九年河北新報社入社。十一年支那事變の應召も負傷して内地送還。除隊後歸還作家として活躍。十六年文化奉公會結成の盡力、翌年大政翼賛會文化部副部長。

著書『吳淞クリーク』（昭和十四年七月十九日中央公論社）、『霧の夜』（昭和十五年八月五日青木書店）、『牧の身邊』（昭和十五年九月）、『白山高山書院』（『書人草・上巻』（合著、昭和十六年十一月）、『白軍軍保護院』（『祖國のため』（合著、昭和十六年十一月五日）、『省堂月刊』（『風と緑の心・下』（昭和十六年十一月十八日）、『藝社』一歸還作家 書きつらうし 長篇小説『純文學叢書』（『貧しい人生』（昭和十七年）、『十五白錦城出版社』（『心の思考』（昭和十七年二月五日）、『藝社』（『出發』（昭和十七年九月十五日錦城出版社）、『國民文學叢書』（『丹藤永之介 わたなげ 新作品』、『煉好 ねんこう 人』（昭和十七年十月）、『白有光社』（『梅比野士朗 うら 國』（昭和十七年十月）、『二十日有光社』（『梅の宿』（昭和十八年）、『二月十五日新太陽社』（『上田 かみ 廣 ひろ 日比野士朗集』（昭和十八年二月）、『二十日改造社』、『新日本文學全集』（『同宿の兵』（昭和十八年十月）、『二十五日豐國社』（『一軍人の生涯（森田徹少將傳）』（昭和十八年十一月）、『二十日日本書館』（『生産文學』（昭和十九年七月）、『二十日みみ出版株式會社』、『生産文化叢書』（、『陸軍豫科士官學校』（『文化奉公會編、昭和十九年七月）、『二十五日大阪・増進堂』、『陸軍教育叢書』（、『生誕』（昭和



(二十一年十月十日新太陽社)、『初聲』(昭和二十二年二月)、『日増進』(少年小説)、『少年』(昭和二十二年八月十五日日本雄弁会講談社)等。